キャラクター名
護国院　駆(ごこくいん　かける)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ バロール	ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	高校生
オプショナル		年齢	16	性別	男
覚醒	犠牲	衝動	自傷	初期侵食率	32 %
出自	有名人	経験	大きな転機	邂逅	師匠

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	2	0	0			2
感覚	2	0	0			2
精神	3	0	1			4
社会	1	1	2	1		5

HP	28
行動値	4
(非装備時)	6
戦闘移動	11
全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	2		交渉	1	
回避			知覚	1		意志	3		調達	5	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	3	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ジュラルミンシールド	白兵	2r-2	4	1		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
リアクティブアーマー	11			-2	HPダメージ2D軽減　シナリオ1回

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

コネ:要人への貸し	
コネ:手配師	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
起源種	P	N		
護国院　庄司	P　尊敬	N　恐怖		
柊沢　真夜	P 連帯感	N　嫉妬		
茨　あきら	P　友情	N 疎外感		
リオ	P 幸福感	N　悔悟		
セナ	P　庇護	N　悔悟		
	P	N		

最大財産P:　20	残り財産P：　1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
マグネットフォース	1	2	オート					
効果：行動を消費せずカバーリング								
磁力結界	3	3	オート					
効果：ガード値+LvD								
電磁障壁	1	2	オート					
効果：ガード値+4D　シーン1回								
魔人の盾	3	4	オート					
効果：ガード値+Lv*10　シーン1回								
孤独の魔眼	1	4	オート					
効果：範囲攻撃を自分に　シナリオLv回								
時の棺	1	10	オート				100	
効果：判定強制失敗　シナリオ1回								
虚無の城壁	3	2	セットアップ					
効果：ラウンド中ガード値+Lv*3								
グラビティガード	3	3	オート					
効果：ガード値+LvD								
セットバック	1	2	オート					
効果：バッドステータスLv個回復								
マグネットチェイン	1	4	オート				リミット	
効果：ガード不可無視　シナリオ1回								
ディメンジョンゲート	1	3	メジャー	至近	効果参照	自動成功		
効果：どこでもドア　他人も使用可								
セキュリティカット	1	1	メジャー	至近	効果参照	自動成功		
効果：ロック解除　知覚かRC								
効果：								

高校2年生でサッカー部のマネージャーをしながらUGNにエージェントとして協力したりオーヴァードサッカーをやったりしている。
覚醒したのは中学2年生の時で、覚醒したせいで当時大会を勝ち進んでいたサッカー部に参加できなくなり、そのせいもあり大会では敗退。理由も話せないため当時の仲間とは疎遠になってしまった。性格は基本とても明るく、周りの人にも影響を与えるほど。今でもサッカーが大好きであり、スキがあれば祖父にサッカーを教わっている。
エフェクト演出
魔眼の巨大な手のような障壁に雷をまとわせて防ぐ。言っちゃえばイ〇ズマイ〇ブンのゴ〇ドハンド。
成長報告1：虚無の城壁Lv3で取得、調達Lv5に、情報:UGNLv3に、社会を5に
成長報告2:グラビティガードLv2で取得、セットバックLv1で取得、マグネットチェインLv1で取得、ジュラルミンシールド常備化
人為[faker]後に自分の無力さを実感し、祖父のもとへ修行へ行き、守るための"力"と"意思"を身に着けて、奪われたものを取り戻す戦いへ身を投じる。
思い出の品:リオとサッカーした時のボール
濫觴、人為を経て自分の守る力の限界を感じ、攻撃する力を持たない事に少しコンプレックスを持っていたが祖父との対話でそれを振り切る。(羨ましいという気持ちはある)